

## 支部だより

北海道支部からのたより

水谷武臣<sup>1</sup>, 宮津 基<sup>2</sup>, 相沢智康<sup>1</sup>, 田中良和<sup>1</sup>

<sup>1</sup>北海道大学大学院先端生命科学研究院

<sup>2</sup>旭川医科大学生理学講座自律機能分野

### はじめに

北海道支部では札幌を中心とし、室蘭、旭川にそれぞれ地区委員を設け活動しています。今回のたよりでは、毎年11月に複数の学会の垣根を越えて開催される合同シンポジウムと40数年続く恒例の支部例会に加え、2012年3月に開催された生物物理学会関連の2件の国際シンポジウムのようすを、各会議に携わった先生方から開催順に報告させていただきます。いずれの会議も寒い季節中に催されており、私たちの報告が本号発行時における暑い夏の清涼な風となればたいへん幸いです。

### 2011年度合同シンポジウム「生命現象の分子レベルでの解明」(水谷武臣)

日本生物物理学会北海道支部、北海道分子生物学研究会、日本生化学会北海道支部の3団体連携の「合同シンポジウム」が、2011年11月11日に北海道大学理学部5号館大講堂で開催されました。北海道内の若手研究者を中心に、100名を超える方々が集い、交流をする会となりました。今年のテーマは、「生命現象の分子レベルでの解明」でした。各団体から2名ずつの合計6名の講演者が他分野の研究者にもわかりやすく興味を抱けるように研究の紹介をしてくださいました。日本生物物理学会北海道支部からは小野寺智洋先生(北海道大学医学研究科)と伊東大輔先生(北海道大学大学院工学研究院)に御講演いただき、細胞から生物個体と病理にまでつながるお話をさせていただきました。講演会合間のコーヒブレイクや講演会後の懇親会では、講演者、座長、世話人を中心に大いに交流が深ま

りました。ふだんの研究活動の中では、自身の専門とは異なる研究分野の方々と交流する機会はそれほど多くありません。合同シンポジウムのような形で異分野の研究者と交流し、最新の研究に触れながら新しいアイデアを考える、多忙な昨今ではありますが、このような機会があるのはとてもよいことだと感じました。

### 2011年度日本生物物理学会北海道支部例会(宮津基)

2011年度の例会は2012年3月6日に、旭川市民文化会館の第二会議室で開催され、支部長の石森浩一郎先生(北大・院総化)を旭川の地区委員である高井章(旭川医大・生理)が例会担当幹事として現地で補助する形で行われました。例年演題の多くは札幌在住の、学部学生や修士課程の大学院生が卒業論文を終え初の学外の公式口頭発表として、あるいは、ドクターコースやポストクの若手研究者らの発表により、20を超える演題数となります。旭川-札幌間140kmの距離を考えると当初からその減少が予測されました。例会史上最北の旭川におけるプログラムの目玉として特別講演を京都大学工学研究科の森泰生先生と東京都医学総合研究所の星詳子先生にお願い致しました。森先生は「TRPチャンネルによる酸素センシング」、星先生は「光CTへの道」という演題でご講演いただきました。一般演題締め切り当日になって申し込みが10未満だったときには高井先生と、「森先生、星先生に3時間ずつご講演いただく」と本気とも冗談ともつかぬ会話をし、癒しの「森」、希望の「星」として心の支えとさせていただきました。室蘭工大の加野裕先生には室蘭から270kmの遠路遙々発表していただき、最終的には19題の演題となりました。参加者は例年に比べて少なかったことは否めませんが、はじめての方を含め40名以上の方が参加された上に、結晶構造から生体測定法までと多岐にわたった話題にもかかわらず、ほぼすべての方が退席することなく始まりから終わりまで発表を聞かれました。森先生がご講演の中で述べられましたように階層の違いこそあれ「酸素」に関する発表が多かったのが特徴的でした。若手の特に優れた発表をされた関根由可里氏(北大・院総化)、今井瑞依氏(北大・院総化)、Manisha Tiwari氏(北大・院生命)の3名に発表賞が授与されました。以上、終わってみれば通常とは幾分異なる一体感のある会議になったように思います。今回、いちばんの心配は天候でした。昨冬は大雪のため札幌-旭川間不通になること数知れず。兎にも角にも無事例会を開催することができまして、ご発表、ご参加、ご協力いただきました皆様に、この紙面をお借りして心よりお礼申し上げます。

E-mail: mizutani@sci.hokudai.ac.jp (水谷)

E-mail: mmotoi@asahikawa-med.ac.jp (宮津)

E-mail: aizawa@mail.sci.hokudai.ac.jp (相沢)

E-mail: tanaka@sci.hokudai.ac.jp (田中)



懇親会にて  
 (上) 左から 加野先生 森先生  
 (下) 左から 金城先生 星先生 石森先生

### 9<sup>th</sup> Japan-Korea Bilateral Symposium on Biological NMR (相沢智康)

第9回になる Japan-Korea Bilateral Symposium on Biological NMR が2012年3月16日に北海道大学学術交流会館で開催されました。このシンポジウムは、日本と韓国の生物系のNMR研究者が中心となり、日本と韓国を会場として交互に開催されてきたものです。札幌での3回目の開催となった本年は、本生物物理学会の支部長や学会委員としても活躍されてきた北海道大学大学院先端生命科学研究院の河野敬一先生の退職記念行事の一環として開催され、日本と韓国の研究者による19演題の口頭発表と、29演題のポスター発表に100人を超える参加者が集まる盛会となりました。生物系でのNMRを利用した解析技術の進展を反映して、溶液NMR法によるタンパク質や核酸の立体構造解析やフォールディング、ダイナミクスの研究はもちろんのこと、In cell NMRやメタボローム解析、固体NMRを用いた膜タンパク質の立体構造解析など、非常に幅広い分野の最新の研究成果が発表されました。また、記念行事として開催された今回は、北海道大学の出身で生体分子のNMR解析の分野で著名なトロント大の伊倉光彦先生のご講演のほか、現在までこのシンポジウムの開催に御尽力されてきた、ソウル大のLee Bong-Jin先生、大阪大・ソウル大の阿久津秀雄先

生、そして河野先生ご自身にもご講演いただき、生物系のNMRの歴史から最新の技術までを俯瞰できる貴重な機会となりました。懇親会では、河野先生から生物系のNMR解析の黎明期の貴重なスライドの数々が紹介され、若い世代に対してのエールともいえるべき熱いメッセージが投げかけられました。日韓の親睦と研究交流の絆を強め、来年の韓国での開催の際の再会を誓って、今年のシンポジウムは幕を閉じました。

### Sapporo Symposium on Advanced Protein Crystallography (田中良和)

本シンポジウムは、北海道大学大学院先端生命科学研究院田中勲教授の退職記念事業の一環として2012年3月17日に北海道大学理学部大講堂で開催されました。国内外で活躍されている8名の田中研究室卒業生の方々がご講演され、また、現役の学生を中心に38演題のポスター発表も行われました。研究室関係者を中心に約80名の方が参加し、基礎研究からプログラム開発、創薬研究にいたる構造生物学の幅広い分野について活発な議論がなされました。また、研究室関係者が多かったこともあり、最先端の研究成果だけでなく、昔話なども飛び出し、笑いの絶えないシンポジウムとなりました。卒業生にとっては、現在の研究室の学生と接することのできるよい機会となり、一方、現役の学生にとっても、伝説の先輩に実際に会って武勇伝の真相を聞くことができるような貴重な機会となりました。また、一部の学生は、民間企業に勤める先輩に就職に関する相談などもしていたようです。卒業以来、はじめて大学に来た人も多く、講義室や実験室を見て懐かしいという声が絶えませんでした。卒業して民間企業に就職すると大学とは疎遠になりがちですが、民間企業の方が最近の学生のトレンドを掴むことができたり、学生が社会人の先輩と接することで意識改革できたりすることを考えれば、卒業生が大学に来て学生と接する機会がもっとあってもよいのかもしれないと思いました。

### さいごに

生物物理若手の会主催の「夏の学校」が2012年8月31日から北海道で開催されます。詳細は本誌52巻1号をご覧ください。ご興味をもたれた方皆様こそってご参加していただきカラリとした北海道の夏の空の下で熱い議論を展開していただきたいと思います。また、北海道支部例会のプログラムや関連イベントの詳細は公式HP (<http://altair.sci.hokudai.ac.jp/biophy/>)にてご覧いただけます。